

教育実践報告

教職を目指す学生のつながりを築くオンライン授業 —「生徒指導概論」及び「教職特講演習」の実践報告—

藤江 玲子

Building connections among Pre-service Educators via Online Classes:
Practice Report Focused on “Introduction to Student Guidance” and “Special Lectures
of Practical Teacher’s Training”

FUJIE Reiko

要 旨

「チーム学校」という言葉に示されるように、教育現場では、さまざまな状況や課題に対処するために、連携・協働する力が求められている。加えて、教職を目指して学ぶ学生たちは、教育現場に出れば「ウィズコロナ」あるいは「ポストコロナ」という今までにない状況の中で連携・協働して状況に対応する力が求められている。COVID-19の影響により、大学の授業はオンラインに移行することとなった。本実践では、その中で「つながりを築く」ことを意図的に取り入れながら、教職を目指す学生が、連携・協働してさまざまな課題に対応できる力を養うことを目的として授業に取り組んだ。本稿では、教職専門科目「生徒指導概論」及び選択科目「教職特講演習Ⅰ」のうち、特徴的な取り組みについて報告する。

キーワード

COVID-19 オンライン授業 Teams チーム学校 生徒指導

目 次

- I. 本実践の背景と目的
- II. 授業の方法
- III. 授業の概要と学生の反応
- IV. 考察と課題

注

文献

1. 本実践の背景と目的

1. コロナ禍の中の学生

COVID-19感染症の問題が学生に与える負の影響が、明らかになってきている。たとえば、静岡県立大学は調査を通じて、学生が感染や学生生活等に対して高い不安を抱えている状況を報告している(静岡県立大学、2020)¹⁾。コロナ禍が人の心に与える負の影響については、筆者が所属する心理系の職能団体や学会も、早い段階から警鐘を鳴らしていた(長野県公認心理師・臨床心理士協会、2020²⁾；日本学校心理学会、2020³⁾；日本認知・行動療法学会、2020⁴⁾；日本臨床心理士会、2020⁵⁾)。

ひとり暮らしのある学生は、「ゴールデンウィークが一番つらかった」と語った。子どもの支援に関わるアルバイトが休みとなり、人と話すのはコンビニエンスストアで店のマニュアルに沿った短い会話だけという日々が続いたという。授業はどうなるのかという不安や未来への不安、手に入りにくくなっていたマスクが日々減っていくことへの不安など、さまざまな不安をかかえながらひとり過ごしていた様子がかがわれた。また別のある学生は、家族に医療従事者がおり、感染を警戒して外出を控えるように伝えられていることや、部屋で過ごす日が続くようになってから寝つきが悪くなっていることなどを語った。

あたりまえのように続いていた日常の営みが途絶えた中、オンライン授業が開始されることとなった。オンラインの中とはいえ、時間が来れば行くべき場所があり、なすべきことがある。人と会うことができる。先人の智慧に触れ、自己の変容や成長を実感することができる。教職を目指す学生たちは、学んだことを子どもたちのために活かす未来を思い描くことができる。学生にとって、オンライン授業が意味ある学びとなるために何ができるか、模索する日々が始まった。

2. 教職を目指す学生が求められる力

中央教育審議会(2015)⁶⁾は、その答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に

向けて～」の中で、これからの教員に求められる資質能力として、「使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力等」といった不易の資質能力とともに、「組織的・協働的に諸課題の解決のために取り組む専門的な力」を掲げている。

また、文部科学省(2017)⁷⁾は「教職課程コアカリキュラム作成の背景と考え方」において、「教員は教職に就いたその日から、学校という公的組織の一員として実践的任務に当たることとなるため、教職課程には実践性が求められている。このため教職課程は、学芸と実践性の両面を兼ね備えていることが必要とされ、教員養成は常にこの二つの側面を融合することで高い水準の教員を養成することが求められてきた」と述べている。

加えて、学生たちが目指している教育現場では、「ウィズコロナ」、あるいは「ポストコロナ」という、今までにない状況に対応してゆくことが求められている。「チーム学校」の一員として、子どもたちや学校にとって最善のことを目指し、変化に対応した工夫を重ねていくことのできる力がますます必要とされることが想定される。

困難な状況や変化に対応する力として、近年「レジリエンス」という概念が着目されている。レジリエンスは、多様な領域にわたる研究の中で扱われ、定義や、仮定されている構成要素もさまざまである(高樽・藤田、2014)⁸⁾。高樽・藤田(2014)⁸⁾は、心理学・教育学・精神医学・社会学・看護学領域の文献を対象として、“resilience”の概念分析を行い、「人が脅威の存在や精神的不調の誘因となる出来事に直面した時に、個人特性を発達させ、対処する力、捉え直す力を獲得し、回復へと導き、肯定的な方向に変化させるもの」と定義している。

アメリカ心理学会は包括的な視点から、レジリエンスを「逆境、トラウマ、悲劇、脅威、または家族や人間関係の問題、深刻な健康問題、職場や経済的ストレスなどの重大なストレス源に直面した際に上手に適応するプロセス(“the process of adapting well in the face of adversity, trauma, tragedy, threats or significant sources of stress- such as family and relationship problems, serious health problems or workplace and financial stressors”)」と定義している。アメリカ心理学会がレジリエンス

を構築するための方法として、第一に掲げているのが、「つながりを築く(Build your connections)」ことである(American Psychological Association, 2012⁹⁾、^{注1}。

レジリエンスについては、システムと人の双方に関する能力と捉える立場もある(Zolli & Healy, 2012)¹⁰⁾。Zolli & Healy(2012)¹⁰⁾は、システムのレジリエンスについて「極度の状況変化に直面したときに、基本的な日常と健全性を維持する能力」と定義し、「信頼と協力」が果たす役割が重要であることを指摘している。教職を目指す学生が求められる連携と協働の力は、学校という組織がレジリエントな存在となるためにも重要と言える。

3. 本実践の目的

以上のように、教育現場では、さまざまな状況や課題に対処するために、連携・協働する力が求められている。加えて、教職を目指して学ぶ学生たちは、教育現場に出れば「ウィズコロナ」あるいは「ポストコロナ」という今までにない状況の中で連携・協働して状況に対応する力が求められている。COVID-19の影響により、大学の授業はオンラインに移行することとなった。本実践では、その中で「つながりを築く」活動を意図的に取り入れながら、教職を目指す学生が、連携・協働してさまざまな課題に対応できる力を養うことを目的として授業に取り組んだ。本稿では、教職専門科目「生徒指導概論」及び選択科目「教職特講演習Ⅰ」の中から、「つながりを築く」という観点で特徴的な取り組みについて報告する。

II. 授業の方法

1. 使用ソフトと準備

オンライン授業は、2020年5月7日から開始された。使用ソフトは、Microsoft社のTeamsである。授業開始に向けて、松本大学(以下、本学という)では急ピッチで準備が進められ、教職員向けの研修会が開催された。また、近隣の研究室の教職員間で情報交換、学習会、リハーサルなどを行い、授業開始に備えた。授業開始後も、情報センターや、他の教職員

から、さまざまな情報やサポートを得て、授業に活かしていった。

なお、本学のCOVID-19の影響に対するオンラインの導入の経緯は、本誌所収「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響に対する総合経営学部・人間健康学部教職センターの対応—『教育実習』および教員採用指導を中心として—」(山崎・藤江・小松・岩間・中島・廣田・室谷・佐藤・石井、2020)¹¹⁾に詳しい。

2. 授業における配布資料と課題の扱い

授業で使用するパワーポイントの資料は、そのまま印刷できるように各ページ6スライドのpdfファイルに変換し、事前にTeamsにアップした。学生には、その旨をメンションで伝え、プリントアウトして授業に臨むことを勧めた。

オンライン授業が始まって間もなく、本学の情報センターの調査により、パソコンやプリンターを保有していない学生が一定数いることがわかったため、受講者には、スマートフォンで受信したデータをコンビニエンスストアでプリントアウトする方法についてもあらかじめ伝えた^{注2}。

課題は、使用目的によって、Teams内の「課題の割り当て」機能を使用するものと、Wordや手書きで作成するものに分けた。

Teams内の「課題の割り当て」機能を用いた回答については、個別にコメントを付して返却するとともに、同意を得られたものを掲載して回答集を作成し、Teams内で共有した。Teamsには、提出された課題をまとめてExcelにダウンロードできる機能がある。それをWordに貼り付け、体裁を整えれば短時間で回答集が完成する。それをTeamsにアップし、メンションの機能を用いて受講者全員に伝える。それを読むことも授業外の課題とした。

その他の課題の作成・提出については、パソコンやプリンターを保有していない学生に配慮し、複数の方法から選択できるようにした。メールで提出されたWord版の課題に対しては、校閲機能を用いてコメントを書き込み、返信した。手書きの原稿用紙の写真がメールに添付され提出された場合は、プリントアウトをし、赤ペンで添削した上でスキャナーで読み取り、データを返送するという形で対応した。

3. 倫理的配慮

授業の成果物(感想、回答、教材等)や語られた事柄を本稿に掲載することについては、学生の下承を得ている。また、本稿で報告する授業においては、事例を多く紹介しているが、いずれも複合事例であり、学生にはその旨と、その根底にある教員および臨床心理士の守秘義務について伝えてある。

Ⅲ. 授業の概要と学生の反応

1. 教職専門科目「生徒指導概論」

1) 受講生

教職課程を履修する3年生30人。受講生の所属は4学科にわたっており、取得を目指している免許状は、商業(高)、地歴・公民(中・高)、保健体育(中・高)、養護教諭、栄養教諭である。

2) 授業の目標

この授業では、教科免許の取得を目指す学生と養護教諭及び栄養教諭の取得を目指す学生が「生徒指導の理論及び方法」を共通に学び、その後分かれて、教科免許取得の学生のみが「進路指導及びキャリア教育の理論及び方法」を学ぶという形で授業を展開している。本稿では、共通部分の「生徒指導の理論

及び方法」について報告を行う。

文部科学省が作成した教職課程コアカリキュラムは、「生徒指導の理論及び方法」の目標を、「生徒指導は、一人一人の児童及び生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して教育活動全体を通じ行われる、学習指導と並ぶ重要な教育活動である。他の教職員や関係機関と連携しながら組織的に生徒指導を進めていくために必要な知識・技能や素養を身に付ける。」としている。本科目では、これを生徒指導領域の授業の目標としている。

3) 授業の構成

授業の構成を、表1に記す。

オンライン授業の開始にあたって、コアカリキュラムに沿った当初シラバスを踏まえ、授業計画表を再度作成した。ストレス・マネジメントは当初、1回のみ予定であったが、教育現場や放課後児童クラブ等で、子どもたちがさまざまなストレスを抱えている状況が見られる状況が、現職教員や職能団体等を通じて伝わってきたため、より丁寧に取り組むこととした。現職教員や子育て支援関係者の研修で扱ってきた内容を大学の授業用に改変し、事例の紹介や、学校で活かせるワークを増やした。それによって扱う時間が減った内容については、授業外の課題や他の回の授業に振り分けた。

表1 「生徒指導概論」の構成

	内容
第1回	生徒指導の意義・役割・位置づけ
第2回	ストレス・マネジメント—教師がよい状態で子どもと関わるために—
第3回	ストレス・マネジメント—学校での活用—
第4回	ストレス・マネジメント—学校での活用—
第5回	学習理論と子どもの行動変容
第6回	発達に関わる課題の理解と対応
第7回	不登校・いじめの理解と対応
第8回	インターネットや性に関わる課題の理解と対応
第9回	児童虐待・自殺予防
第10回	チームによる指導・支援—学校で起こりうる問題への対応—
第11回	非行・暴力・反社会的行動の理解と対応(ゲスト講師)
第12回	進路指導とキャリア教育

注)当初予定していた15回のうち実施できなかった分については、レポート課題を課した。

テキストは、文部科学省『生徒指導提要』(2010)と杉山登志郎『発達障害の子どもたち』(2007)を使用した。『生徒指導提要』については、授業内または授業外で扱い、『発達障害の子どもたち』については、授業外で読み進め、課題を提出することとした。

4)生徒指導上の課題に向き合う

12回の授業のうち、特徴的な回について記す。

(1)自己紹介—教育や子どもへの思いを語る—(第1回)

オンライン授業開始日の1限目が、本講座の第1回にあたった。全学的にゼミなどでオンライン授業に慣れていく段階を丁寧に進めていたため、全員がスムーズに授業用のTeamsに入ることができた。筆者は、この時が学生との初対面であった。

カメラをオンにして語ることに躊躇する学生がいることが推測されたが、自己紹介では、全員がカメラをONにして語れることを目指した。はじめに生徒指導について学ぶ意義に関わる事例を扱い、自己紹介の中でその感想を語ってもらうことにした。教職を目指す学生であれば、教育や子どもに関するテーマについてなら躊躇を越えて語れるであろうと考えたためである。自己紹介の前に、発言内容を整理できる準備の時間を設けた。その上で、「互いに顔を見て伝え合えるように、可能な限りカメラをオンにして話してほしい」と伝えた。全員がカメラをONにして語り、その習慣が最後まで続いた。

自己紹介では、緊急事態宣言の中で過ごすそれぞれの様子や思い、事例が想起させたさまざまな経験、他の学生の発言へのポジティブな感想などが語られた。「皆と久しぶりに会えてうれしかった」という発言もあった。

まとめとして、授業の感想を記す課題をTeams上で出した。末尾に、「いろいろな感じ方や考え方

に触れ、教育について一緒に考える機会としたい。名前を伏せ、回答をチームのメンバーで共有してもよいか」という旨の質問も添えた。「はい」を選択した学生の回答を集めてファイルを作成し、Teamsにアップした。ファイルを読む時間を授業外の学習とした。また、Teams上で個別に課題へのフィードバックを返却した。

学生の回答の中から、学生同士の関わりに関連するものを表2に抜粋する。感想には、初めてのオンライン授業への不安や安堵(回答a)、他の学生との関わりを通じて得られた喜び・気づき・目標の再確認(回答a・b・c・d・e・f)等が記されていた。紙面の都合により全文を掲載し得ないが、提出された回答のすべてに、同様の思い、これから出会う子どもへの思い、授業への意欲等、教職を目指して進もうとする思いなどが記されていた。

(2)学校におけるストレス・マネジメントの活用(第2~4回)

ストレス・マネジメントを扱うにあたって、コロナ禍の中での学校や子どもたちの状況を伝えるとともに、まず自分で実践し、よいと思ったことを子どもたちのために活かしてほしいと伝えた。初回にはリラクゼーションを扱った。2回目の授業の前に、リラクゼーションの復習を希望する学生は絵文字で伝えてほしいとTeamsのチャット機能で連絡したところ、見る間に「希望する」を示す絵文字のカウントが増えていった。8割近い学生がリラクゼーションをすることを望んでいた。以後、しばらくは、授業をリラクゼーションから始め、リラックスして活動に取り組めるようにした。

3回連続の授業の最後に、「ストレス・マネジメントに関する知識や技能を、学校や生活のどのような場面で、どのように活かし得ると思いますか」とい

表2 学生の回答(抜粋)(第1回)

a	今日は初めてのオンライン授業ということで少し不安もあったが、なんとかやっていけそうな感じがした。自己紹介でもあったが自分とは考えも違い、自分より大人の考え方をしている学生も見受けられて感心した。
b	それぞれが感じていることや授業について考えていることを共有することができ、とても良い時間だった。
c	一緒に受講している同士たちがこれからの教育活動にとっても深い考えを持っていることに感動した。
d	この講義に参加している皆さんが非常に意識が高く、これからはすごく楽しみになりました。
e	他の学生のコメントを聴いて、そういう考え方もあるんだなと何度も思わされた。
f	この授業を通して、たくさんの友人が言っていたように子どもの内側を見られるような教員を目指していきたい。

う課題を出した。学生の回答を、表3に抜粋する。それぞれの職種における活用方法(回答a・b・c)や、実際に活用してみた感想とキャリアに関わる場面での応用等(回答d)が記されていた。中には、A4の用紙1枚にわたって、①生徒への支援の中での活用法、②保護者への支援の中での活用法、③教員のメンタル・ヘルスを維持するための活用法、④私生活や仕事への活用法というように活用法を考えた学生もいた。学生に「メンバーの回答例集は宝であり、それらを読むことで教員としての引き出しを増やしてほしい」と伝え、回答集をTeams内で共有した。

(3)「堀の中の中学校」の担任に学ぶ(第11回)

第11回の「非行・暴力・反社会的行動の理解と対応」では、矯正教育に携わっている松本少年刑務所の法務教官／教育専門官を講師として招いた。松本少年刑務所は、日本で唯一、中学校と高等学校の教室を有する刑務所である。講師はその中学校の担任であり、教育委員会から非常勤講師が発令されている。当日は、「『堀の中の中学校』担任として心掛けていること」というテーマでお話いただいた。Teamsの挙手の機能を活用して質疑応答の時間をとったところ、活発に質問が出て、時間が足りなくなるほどであった。

授業後に、課題として800字以上の感想を求めた。学生の感想の一部を表4に抜粋する。さまざまな背景を持った生徒へのまなざし(回答a・b)、教師としての在り方への思い(回答a・b・c・d)、先輩教師の姿勢から学んだこと(回答e・f)、教職への道

を歩む覚悟(回答g)等、教育や教師という職業への理解や洞察の深まりが記されていた。受講生の回答集はA4判で10ページにのぼった。この回答も、Teams内で共有した。

(4)学校で起こりうる生徒指導上の場面への対応

第5～9回で行った授業のまとめとして、学校で起こりうる生徒指導上の場面への対応をグループで考える演習を行った(第10・12回)。授業の流れを表5に示す。

発言の際の留意点として、「他の学生と意見が異なるとき、それを否定するのではなく、そこに何を足せるかという発想で考えてほしい。また、受け取る側も、“否定された”と思わず、考えが及ばなかった部分に足してもらったというように考えてほしい。」と伝えた。グループワークで学生は、他者の意見を尊重しながら、建設的に考えを述べていた。第12回の終わりに、まとめの課題を出した。内容は、他の学生の意見を踏まえ、テーマA～Dのすべてについて対応案をまとめるものとした。課題の最後には、取り組みの感想を記す欄も設けた。

学生の感想を表6に抜粋する。他の学生から多くを学べたことや対応の選択肢が広がったこと(回答a・b・c・d・e・f)、生徒指導の問題をさまざまな視点から考えたり対応したりすることの重要性への気づき(回答b・c・d・e・f・g・h)、いろいろな職種や免許取得を目指す学生と一緒に学べること大切さ(回答h)、実践力をさらに養いたいという思い(回答c・d・f)、自分の意見への肯定的なフィードバックが自信

表3 ストレス・マネジメントの活用方法(学生の回答より)

a	(養護教諭として子どもと関わる場面)その子どもは今どういった心情であるのか、どういった思考であるのかなどを推し量り、それによって支援の仕方を変える。自分の力だけでは力不足であると感じた時には他の教員やカウンセラーなどと連携をとり、子どもが一番負担にならないような支援をしていく必要があると感じた。また、ストレスとの向き合い方について知識を身に付けさせてあげ、少しでも対処できるような引き出しをつくってあげることが、子ども自身を成長させるのにもいい経験になると感じた。
b	誰かに悩みを相談されたとき、広い視点(感情、思考、行動など)から問題を考えることができるので、様々な解決方法を見つけられると思う。
c	朝教室に入った時の教室の雰囲気を見て活かすことができると思う。何事も始まる時が一番肝心で、生徒によってどのような朝を迎えるかは変わってくると思うし、それを表情を見て理解することが教員としての力にもなってくると思う。
d	前回の授業の後に教育実習に行く学校に電話をかける予定があったが、リラクゼーション法をゆっくりやった後だったからかいつもは緊張してしまう電話も緊張せずに話すことができた。就職の面接や試験の前に行い、少しでも緊張をほぐせるようにしたいと思った。また、自分の感情を値にするというのもやったことがないので、気持ちを落ち着けたい場面で実践してみたいと思った。

につながったこと(回答i)等が記されていた。

学生には、名前を掲載せずに回答をチーム内で共有することをあらかじめ伝え、回答集を作成した。

回答集はA4判10ページ分にのぼった(図1)。

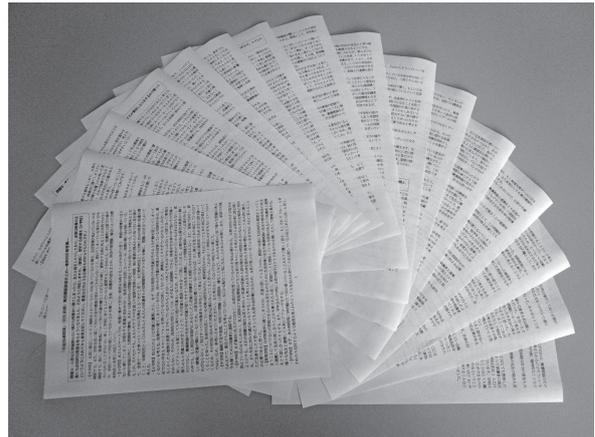


図1. 学生の回答集

表4 『塀の中の中学校』担任として心掛けていること」感想(学生の回答より)

a	教育の在り方について改めて考えさせられました。塀の中の中学校では様々な年齢の生徒がいて、生徒ひとりひとりに変えられない過去や背景があり、でもそれらを含めてその生徒であるわけであって、先生も生徒もそれを胸に刻んだ上でお互い向き合っているということを感じました。(中略)今回の先生のお話からは教育の姿、在り方を改めて学びました。
b	生徒の背景に目を向けることの大切さがわかった。その生徒が生きてきて出会った人、周りに飛び交っていた言葉などがその人の現在になっていて、それに応じた声掛けをしようとすると人の数だけ種類があるものであるから、自分は教師としての声掛けをもっと学んでいかなければいけないと感じた。
c	私たちは教員としてすべての生徒と向き合わなければいけなく、そのあとの子どもたちの生きていき方は教員次第で変わってくる可能性があるということを忘れてはいけないと感じた。私自身が教員になれた際には、指導する子どもたちがそのような犯罪に進んでしまわないよう、SOSの出し方は違うと思うが、一人ひとりのヘルプに気が付いて、対処していきたいと感じた。
d	私が先生のお話で最も印象に残ったのは、「どんなにできなくても必ず支援・応援する」ということです。教師というのはただ教えるのではなく、教えたことが身に付く・身に付けられるように支えなければならないのだと気付かされました。
e	自分の仕事・役割にプライドを持ち、全うする姿勢に感銘を受けました。私も自分の人生をかけられるほどの職に教員生活がなるよう、努めていけたら良いな、と思いました。
f	生徒に対して先生くらいに誠意をもって接することができる教員になりたいと感じました。
g	教職を目指す上で自分の信念や、生徒を第一に思うことなどを忘れてはいけないと思った。最後に指導理念として“「できない自分」を責めなくていいんだ。でも「やろうとしない自分」は絶対に許すな」というのを聞いて、ぐっときたし、今の自分にも言えることなのではないかと感じた。聞いたお話を糧にして、これからも教員を目指して勉強をしていきたいと感じた。

表5 演習「学校で起こりうる生徒指導上の場面への対応」の展開

前時の予告	<ul style="list-style-type: none"> ①次の授業では、学校で起こりうる生徒指導上の場面への対応についてグループで意見交換を行う。 ②テーマは、以下の4つのうちから希望するものを選択する。 <ul style="list-style-type: none"> A：授業に集中することが困難な児童・生徒への対応 B：登校しぶりが始まった児童・生徒への対応 C：いじめの事案を把握した際の対応 D：ネット依存の傾向が強まっている児童・生徒への対応 ③当日の朝までにTeamsのチャット機能の絵文字を用いて希望を伝える。
当日の展開	<ul style="list-style-type: none"> ①グループごとに、パワーポイントで具体的な場面を示し、発言する内容を各自で1分間考える。 ②指名に従って、1分以内で意見を述べる。 ③他の人の発言を聞いて新たな気づきや学んだことがあった人は、挙手の機能を用いて発言する。 ④見ている学生はメモを取りながら聞き、最後に一斉にマイクをONにしてグループのメンバーに拍手を送る。

表6 演習「学校で起こりうる生徒指導上の場面への対応」感想(学生の回答より)

a	私には思いつかない考えを多く聞くことが出来ました。非常に有意義な時間であったと思っています。自身の引き出しの内容を増やす機会になりました。
b	みんなの意見から学ぶことが本当に多く、とても学びになりました。自分の意見を述べることはとても緊張したけど、それ以上に周りの意見から学ぶことが多く濃い時間を過ごすことができました。保護者に視点を置いたり生徒に視点を置いたり、色々な観点で物事を考えることが大切だと思いました。学校は何人も先生と子どもたち、地域の人、さまざまな人が関わって成り立っています。学校は本当にチーム戦なんだなと思いました。
c	実際の教育現場に出た際に様々な生徒と向き合っていかなければならない現実がある。その中で教員として生徒とどう向き合っていくか、どう対応するのかを自分自身でも考えることができ、また他の受講生からの意見やアイデアから考えさせられることも多々あった。生徒指導のためには、生徒の問題にある背景に学校全体、家庭、地域と連携を取りながら対処をする必要があると感じた。まだまだ生徒への対応力が未熟であるが、これからの学生生活の中で即戦力になるための力を身に付けていきたい。
d	仲間の意見を聞く中で「その手があったのか」ということが多々あった。教師にもそれぞれの立場や背景があるから違う意見が出ていくことがあり、その中で子供たちのためになることを合意形成していくことが重要であるから、その一人として活躍することができるようになりたいと思った。このような機会があって、仲間がいる中でできることが恵まれていると感じることができた。
e	そういう考えもあるのか、その視点から考えるとそういう意見もあるのかと、掘り下げて討論したいことばかりで時間がとても早く過ぎたように感じた。とっても楽しかったし学びになったし、有意義な時間だった。
f	目指す校種によって視線がだいぶ変わっていくんだなということに気づいた。(中略)その考え方はやはりこのような経験がなければ気がつくことは出来なかった。自分自身の考えに新しい考え方や思考を取り入れる機会となったため、とてもいい活動をさせていただいたと感じた。すべての学生がそれぞれでいい意見を持っていたが、自分を含めまだまだ考え方としては未熟なものだと思う。その為、今回得た様々な校種を目指す人の意見や考え方を自分の糧として、また新たな考え方を自分自身に身に付けていきたい。
g	もし今回の事例のようなことが実際に起きても、自分一人ではなく、他の先生と考えるなど自分の型にはめずいろんな視点から考えて対応していくことを心掛けたい。
h	松大教職課程の履修者の姿は学校現場の縮図のように感じましたし、自分の視点とは違う視点から考えた意見は参考にしたい。
i	自分の意見にはない意見が出てくるので、自分の学びにもなるし、自分の意見が周りの人の学びになるのでとてもいい経験になった。自分の意見を褒められることで自信になった。

2. 選択科目「教職特講演習Ⅰ」

1) 受講生

教職課程を履修する2年生15人、3年生2人、4年生4人の計21人であった。受講生の所属は5学科にわたっており、取得を目指している免許状は、商業(高)、地歴・公民(中・高)、保健体育(中・高)、英語(中・高)、養護教諭、栄養教諭である。

2) 授業の目標

目標は、「求められる教員の資質と能力について理解を深め、教育に対する課題意識を高める。また、小論文・面接・模擬授業等の課題を通じて、教職に就くために必要な実践力を養う」こととした。受講生の7割以上が教科指導法の履修前の2年生であることから、オンラインによる模擬授業については、「やってみる」ことを目標とした。

3) 授業の構成

授業の構成を、表7に記す。

自己の軌跡をふりかえり、また教育の課題をめぐる状況や背景について一定の理解をした上で、書く段階に進むこととした(第1~4回)。小論文については、アウトラインと文章の段階でコメントを返却し、推敲を通じてさらに考えを深めるという流れで進めた。その後、小論文等で扱ったテーマについて、討論や意見交換を行った(第3・6・7回)。グループによる討論や意見交換には、教員採用選考の実施例を踏まえ、集団討論や集団面接の方式を取り入れた。

4) 教育に関わる課題に向き合う

教員採用選考における面接の概要や心得等について、ゲスト講師を招いて学んだ後、集団討論・集団模擬面接を行った(第5・6・7回)。集団討論・集団模擬面接では、それまでの授業での内容を踏まえて

教育に関わる場面やテーマを設定し、意見交換を行った。集団討論は学生が進行し、集団模擬面接は担当教員が進めた。学生自身がいずれかを選択することとした。

テーマはその場でパワーポイントによって示され、考える時間を取ったのち、グループのメンバーはカメラとマイクをオンにすることを呼びかけられる。メンバー以外の学生は、画面の中の展開を見守る。討論や模擬面接の後には、グループのメンバーがひとりずつ感想を述べる時間を取った。学生たちは、緊張の後のほっとした表情を見せながら、他の学生の意見に感心したことや、テーマについてさらに考えていきたいという思いなどを語る。最後に、見守っていた学生が一斉にマイクをオンにして、グループの参加者に拍手を送る。そのような流れで、受講者

の全員が集団討論か集団模擬面接に参加した。

一連の活動のまとめとして、それまでの授業で扱ったテーマについて、自分の意見や考えをまとめる課題を出した。課題のテーマを表8に示す。講座内で共有することが了承された回答をまとめ、回答例集を作成し、Teams内で共有した。

5) オンラインによる模擬授業

模擬授業はオンラインで行った。展開を表9に示す。準備として、ゲスト講師を招き、学習指導案の作りかたや大切な観点等を学習する時間を持った(第8回)。その後、学習指導案を作成し、導入のみをオンラインで実施することとした。教科指導法の履修前である2年生にとっては、授業を組み立てることも、オンラインで授業をすることも初めてであった。

模擬授業に先立って、教材の提示方法の例を伝え

表7 「教職特講演習Ⅰ」の構成

	内容
第1回	ガイダンス、自己分析と自己理解—ライフラインを描く—
第2回	自分が目指す教員像 演習：小論文のアウトライン作成
第3回	学校の危機管理 演習：意見交換
第4回	教育の現状と課題 演習：アウトラインから小論文へ
第5回	演習：集団討論(ゲスト講師)
第6回	演習：集団討論・集団模擬面接
第7回	演習：集団模擬面接
第8回	授業をつくる(ゲスト講師)
第9回	学習指導案の作成
第10回	オンラインでの教材提示 演習：オンラインによる模擬授業(導入)①
第11回	演習：オンラインによる模擬授業(導入)②
第12回	演習：オンラインによる模擬授業(導入)③

注)当初予定していた15回のうち、実施できなかった分については、レポート課題を課した。

表8 課題のテーマ

課題A	教職員が非違行為をしないために、どうしたらよいと思いますか。具体的な例を挙げて、書いてください。
課題B	あなたが勤務する学校でSNSに関するアンケートを取ったところ、「夜中まで友達とのラインが続いて眠れない」という悩みが何件も記載されていました。学校として、どのような対応が考えられますか。思いつく限り、記してください。
課題C	あなたは、教員として必要な資質とは、どのようなことだと考えますか。
課題D	感染症の影響による長い休校の後、授業が再開されることになりました。児童・生徒を迎えるにあたって、あなたは、どのようなことに注意しますか。
課題E	「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、あなたは自分が担当する領域(教科・職種等)で、どのような工夫をしますか。(末尾に想定する学校種・教科または職種をカッコ入りで記してください。)

た。パソコン等のカメラで映すことのできる範囲、黒板もホワイトボードもない自室での代用品の例、必要な字の大きさ、パペット(人形)や絵本を使用する方法等を、実物やモデルを示して伝えた。また、書画カメラでできること、パソコンの画面やファイルの共有方法、パソコンの画面共有についても、パワーポイントで示した。授業で用いた資料の抜粋を図2に示す。

昼休みにTeamsを立ち上げておき、希望する学生にはリハーサルの支援をすることも伝えた。さらに、模擬授業の順番になった時にうまくいかないことがあっても、講座担当者(筆者)や他の学生のサポートが可能であることを伝え、不安の低減を図った。オンライン授業における著作権の扱いと、今年度の特例についても伝えた。

模擬授業は、交代で生徒役を務め、全員が互いに見合い、必要に応じて支援し合うこととした。学生が模擬授業で提示した教材の例を図3に示す。中学生を対象とした保健指導「自然災害に備えて」の導入で、正しい知識を持って備えることの必要性を伝える画面である。担当の学生は、生徒役の学生への発問も組み合わせながら、模擬授業を実施していた。

学生の模擬授業のいずれにも、それぞれの工夫が

あった。クイズを出す学生、体育館の写真を背景に設定して雰囲気を出しながら実技指導の導入を実施した学生などがいた。挙手の機能の使用やオンラインでの発言に慣れていたため、教師役の学生の発問に対し、生徒役の学生が挙手をして答える場面もあった。受講者全員がオンラインによる模擬授業を実施した。

教材の提示等の操作等で時間がかかる場合もあり、授業内でコメントを交わす時間が取れなくなった。

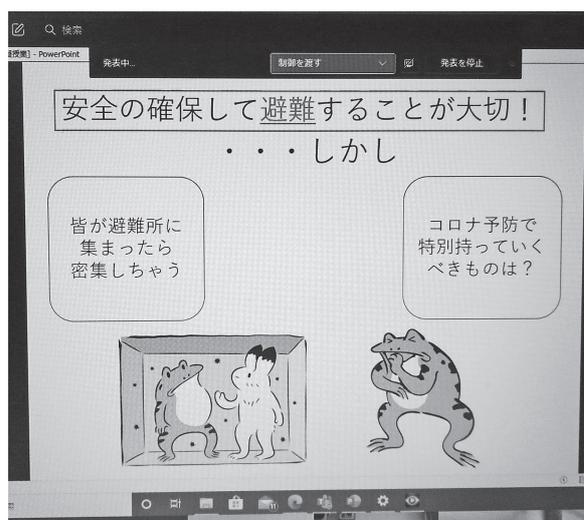


図3. 学生が作成した教材

表9 演習「オンラインによる模擬授業」の展開

準備	<ul style="list-style-type: none"> ①講義「授業をつくる」を受けて学習指導案を作成した、導入のみをオンラインで行うことを伝えた。その際、時間は1人10分程度とし、目標は「やってみること」であることを伝えた。 ②教材の提示の方法について、例示を行った。 ③授業担当者に協力する生徒役の一覧表を作り、事前にTeams内にファイルをアップした。
授業の展開	<ul style="list-style-type: none"> ①応答を行う生徒役が必要な場合は、担当の学生にカメラとマイクをONにして協力するように依頼した。 ②模擬授業(導入—学習課題を提示するまで—) ③模擬授業を担当した学生への拍手 ④生徒役の学生と講座担当者(筆者)から、Teamsのチャット機能を使用して個別にコメントを送る。 ⑤授業後に、当該の授業全体の学習指導案をメールで提出する。



図2. 教材の提示方法に関する資料(抜粋)

そこで、生徒役に割り振られた学生は、授業を担当した学生宛に、Teamsのチャット機能を使用して、ねぎらいとコメントを送るように伝えた。授業担当者(筆者)も、チャット機能を用いて、全員にコメントを送った。

IV. 考察と課題

1. 学生の反応が伝えること

COVID-19の影響により、本学の授業も遠隔で実施されることになった。本実践では、その中で「つながりを築く」活動を意図的に取り入れながら、教職を目指す学生が、連携・協働してさまざまな課題に対応できる力を養うことを目的として授業に取り組んだ。

教職専門科目「生徒指導概論」の感想には、他の受講生や法務教官から得た学びや、そのことを通じての自己の変化、さまざまな視点から問題を見ることの大切さ、チームの大切さ、仲間への感謝の思いなどが記されていた。本講座の特長は、専門を異にする学生の集団であることであるが、立場が異なる人から学び得るものが多かったことを、学生の感想は伝えている。また、オンラインの利点を活かし、回答例集がすみやかに共有できたことで、授業外の時間でも互いの意見や見方によって学び合うことができた。オンラインを通じて、他の学生に対する肯定的なフィードバックが多く行われ、次の活動へのモチベーションにつながったことも、感想からうかがわれる。授業の回数を重ねるほどに、挙手の機能を使用する学生が増えていったが、学生の感想にも記されたように、自分が認められ、受け入れられているという感覚が、闊達な交流につながっていった可能性がある。

選択科目「教職特講演習Ⅰ」でも、教職専門科目「生徒指導概論」と同様に、グループ活動による演習を多く取り入れた。2年生にとっては特に、オンライン授業という慣れない状況に加え、前述のように各演習のハードルが高いことが予想されたため、先の学習が後の学習につながるように課題を進めていくように心がけた。また、全員が見ている中で取り組む演習は、常に4年生を先にし、モデルの役割を担ってもらった。受講生の全員が、オンラインに

よる模擬授業を実施するに至ったのは、学生たちの意欲や使命感の高さもさることながら、教員採用選考を直前に控えた4年生が懸命の姿を見せながら、学習の先頭を走り続けてくれたことが大きかったと考えられる。その中で、「カメラをオンにして発言することができる」、「挙手の機能を使うことができる」、「パワーポイントをはじめ、自らが作った教材を提示することができる」、「発問をすることができる」、「指名し、発言を求めることができる」というように、集団として、オンラインの中でできることが増えていった。

険しいと思われる山道も、仲間に引っ張られたり、力づけられたり、またうれしさを共有したりする中で、気がつくとも標高を上げていた、ということが登山ではあるが、授業の中でも、そのようなことが起きていたことが考えられる。本授業の実践を支えたのは、学びを共にするつながりであり、そのようなつながりを築くことによってオンライン授業の可能性がさらに広がると考えられる。

Bandura(1977¹²⁾、1995¹³⁾)は、ある結果を生み出すための行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の信念を、「self-efficacy」(自己効力感)と呼び、対処行動の開始と持続に影響を与えると述べている。また、Schunk & Mullen(2012)¹⁴⁾は、「自己効力感は、学習に関わるすべての点に作用する」として、自己効力感が、動機づけ、学校への関与、学習、学業成績に影響を及ぼす重要な個人的要因であることを指摘している。Bandura(1977)¹²⁾は、自己効力感は、援助や介入によって高めることができること、その際、4つの情報源(実際場面での遂行、代理的経験、言語的説得、生理・情動的側面)に焦点を当てた介入が有効であるとしている。この理論に照らせば、本実践における学習過程では、成功体験を少しずつ積み上げていったこと、先輩や仲間のモデルに刺激を受けたこと、仲間や教員からポジティブなフィードバックが送られたこと、安心できるつながりの中で失敗を恐れずに未知の状況にチャレンジできたことが、学生の自己効力感に影響を与えた可能性がある。

佐々木(2017)¹⁵⁾は、教職課程を受講する1~4年生の女子大学生165名を対象とした調査を実施し、教師になるために必要な能力や自覚、態度、考えが身につけていると感じているほど、また、目標・理想

とする教師が存在し、どのような教師になりたいか明確であり、具体的に考える機会が多いほど、レジリエンスが高いことを指摘している。その上で、教職科目や実習等においてコンピテンスを高める働きかけや、講義や演習内容と結びつけ、目指す像を具体的に考え、その姿に近づくための具体的な手段や行動を計画するキャリア教育が有効であることを提言している。一定の限界が伴うオンライン授業であっても、佐々木(2017)¹⁵⁾が伝えるような教育を提供できる可能性があることも、学生の感想は伝えてくれる。引き続き、その観点を大切に授業を進めていきたい。

2. 今後の課題

対面授業を想定していた時は、ペア学習からグループ学習へ、また、ジグソー学習やワールドカフェといった学習形態も考えていたが、今回はそこに至ることができなかった。早ければ来春から教育現場で、即戦力として授業や指導に関わる学生もおり、かけがえのない時間の中で、よりさまざまな授業の可能性を伝えなかった。先行の実践に学び、オンライン授業で目指せることを広げる努力をさらに続けていきたい。

本実践の後、本学では対面授業が再開された。その最初の授業のレポートに、複数の学生が「対面授業が受けられることになりうれしい」という趣旨の内容を記していた。実際、対面授業は、学生同士の、また教員と学生の、多くの、そしてこまやかなコミュニケーションから成り立っていることを改めて実感させられている。本稿の中ではオンラインの利点に触れたが、やはり対面授業に比較すれば、一定の限界があることも銘記しておきたい。

なお、学生がどのような力を身につけることのできたかという点については、プリテストやポストテストで示せることが望ましいが、今回、オンライン授業そのものが試行錯誤の連続であり、学生の感想や成果物を用いての報告となった。授業の効果測定についても、今後の課題としたい。

3. おわりに

本実践にあたって、同僚にたいへん助けられた。

わからないことや困っていることについてさまざまな知恵をもらい、リハーサルの手相手にもなってもらった。授業の様子を聞き合い、多くの支えと励みをもたらった。「やってみれば、なかなかいいものだね」、「学生が近いよね。全員が一番前の席にいるような感じで」等、ポジティブな言葉に支えられた。本学の関係者や情報センターからの機に応じたすみやかなサポートもありがたかった。そのすべてに、感謝申し上げます。

注

注1 アメリカ心理学会はレジリエンスを構築するための方法として「つながりを築く」、「健康を養う」、「目的を見つける」、「健康的な思考を受け入れる」、「助けを求める」ことを挙げている。また、「つながりを築く」と関わって、必要なときに支援や目的意識や喜びを得ることのできるグループに所属することを推奨している(American Psychological Association, 2012⁹⁾)。

注2 当初は資料を「クラスの資料」フォルダの中に入れていたが、スマートフォンを使用している学生がフォルダを開けない場合があることがわかり、以後はフォルダを使用していない。このように、オンライン授業が始まってからわかることもあり、学生の反応を確かめながら授業を進めていった。

文献

- 1) 静岡県立大学, コロナウイルス感染症の学生生活への影響について(調査速報)(2020)
<https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/media/survey-results-coronavirus3.pdf>(閲覧日2010.8.15).
- 2) 長野県公認心理師・臨床心理士協会, 新型コロナウイルス感染症関連,(2020)
<https://nagano-shinri.jp/>(更新日2020.8.18).
- 3) 日本学校心理学会, 新型コロナウイルスを乗り切るために,(2020)
http://schoolpsychology.jp/info/info_covid.html
- 4) 日本認知・行動療法学会, 新型コロナウイルスを心配している子どもや若者の支援ガイド(2020)
http://jabt.umin.ne.jp/j/pdf/COVID19_20200401.pdf(公表日2020.4.1).
- 5) 日本臨床心理士会, 【子どもに関わるすべての方々へ】感染症対策下における子どもの安心・安全を高めるために(2020).
http://www.jsccp.jp/userfiles/news/general/file/20200302174321_1583138601335720.pdf(公表日2020.3.2).
- 6) 中央教育審議会, 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)」(2015)
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/01/13/1365896_01.pdf(閲覧日2010.8.15).
- 7) 文部科学省(教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会), 「教職課程コアカリキュラム作成の背景と考え方」(2017)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afiedfile/2017/12/08/1399160_05.pdf(閲覧日2010.8.15).

- 8) 高樽由美, 藤田佐和, 「resilienceの概念分析: 成人1型糖尿病患者の教育への適用の検討」『高知女子大学看護学会誌』39(2), pp1~11(2014).
- 9) American Psychological Association, "Building your resilience", (2012)
<https://www.apa.org/topics/resilience>(閲覧日2020.9.10).
- 10) ゴッリ A. & ヒーリー A. M.(須川綾子訳), 『レジリエンス 復活力—あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か』ダイヤモンド社, pp.10(2013).
- 11) 山崎保寿・藤江玲子・小松茂美・岩間英明・中島節子・廣田直子・室谷心・佐藤厚彦・石井良治, 「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響に対する総合経営学部・人間健康学部教職センターの対応—「教育実習」および教員採用指導を中心として—」松本大学『教育総合研究』, (投稿中)(2020).
- 12) Bandura A, "Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change", *Psychological Review* 84, pp.191-215(1977).
- 13) バンデューラ A.(本明寛・野口京子 監訳 本明寛・野口京子・春木豊・山本多喜司 訳), 『激動社会の中の自己効力』金子書房, pp.1~41(1997).
- 14) Schunk DH & Mullen CA, "Self-efficacy as an engaged learner", Christenson SL (Ed.), Reschly A. L. (Ed.), Wylie C. (Ed.), *Handbook of research on student engagement*, New York: Springer Science + Business Media, pp. 219-235(2012).
- 15) 佐々木恵理, 「教員養成課程における女子大学生のレジリエンスと教職能力, 理想の教師像との関連」『岐阜女子大学紀要』46, pp1-9(2017).